

中国内モンゴル自治区ウーシン旗における 自然環境と社会環境に関する地理学的研究

吉米斯

キーワード： 自然環境，社会環境，ウーシン旗，内モンゴル自治区，中国

1. はじめに

内モンゴル自治区は、牧畜地域であり、乾燥地帯に位置する（巴図，2007）。中華人民共和国の北部に位置し、モンゴル族を中心とする少数民族地域である。歴史上韃靼をはじめ、多くの遊牧民族が活躍した舞台として、歴史家や人類学者たちの注目を集めてきた。

内モンゴルの牧畜業に関する研究は、これまでも多くの研究が行なわれ、研究成果の蓄積がなされている。それらの研究は、草原の退化や砂漠化の回復など、生態環境の問題に対して、自然環境の面を中心とするアプローチが主である。一方、少しずつではあるが社会環境の面からのアプローチもみられる。また、黄砂の発生地を含み西部大開発が進行している内モンゴルについては、日本でも砂漠化を中心として環境問題と改革開放後の農牧業の変化への関心が高まっている。とりわけ、生態環境と農牧業の変化は、土地利用に端的に現れるため、その動向に着目した研究は少なくない。しかしながら、ほとんどの研究は1990年までの時期を対象にしており、退耕還林還草や西部大開発などの政策転換が本格化した2000年以降の動向は、十分に明らかにされていない。一方、2000年前後より、内モンゴルでは統計資料が整備され、統計資料を用いて内モンゴルの諸問題にアプローチする研究も行われてきているが、その研究成果はまだ少ないといえる。

本稿では、内モンゴル自治区オルドス市ウーシン旗に存在している地域問題をめぐり、その原因を自然環境と社会環境との関連に重点を置いて、2000年以降の統計分析を加えて、地理学的アプローチにより考察する。

2. 内モンゴル自治区の概要

内モンゴル自治区は、青海、新疆、チベット甘肅、中華人民共和国の北部に位置し、北緯 $37^{\circ} 24'$ ~ $53^{\circ} 23'$ 、東経 $97^{\circ} 12'$ ~ $126^{\circ} 04'$ に広がり、北はモンゴル国やロシア連邦と国境を接している（図1）。総面積は約118.3万km²、その領域は日本の面積の約3倍に相当し、中華人民共和国全国土面積の12.3%を占める。気温は冬季 -30°C ~ -10°C 、夏季は 15°C ~ 30°C で、地域によっては 40°C を超える場所もある。降水量は年間100~500mmである。草原が全面積の50%を占めている。内モンゴル自治区は、中華人民共和国で最初に民族地域自治区として成立した。2010年時点の総人口は、2413.7万人である。

内モンゴル自治区の行政は、フフホト(呼和浩特)、ボオトウ(包头)、ウーハイ(乌海)、チーフオン(赤峰)、トンリャオ(通辽)、オルドス(鄂尔多斯)、フルンボイル(呼伦贝尔)、ウーランチャブ(乌兰察布)、バインノール(巴音淖尔)の9つ地級市(地域レベルの市)とシンアン(西安)、シリンドル(锡林浩特)、アルシャ(阿拉善)の3つの盟で構成されている(図2)。それら地級市と盟は、さらに52つの旗、17つの県、11つの盟(市)轄県級市、21つの区から構成される。



図1 研究対象地域(内モンゴル自治区・オルドス・ウーシン旗)
出所) 筆者作成

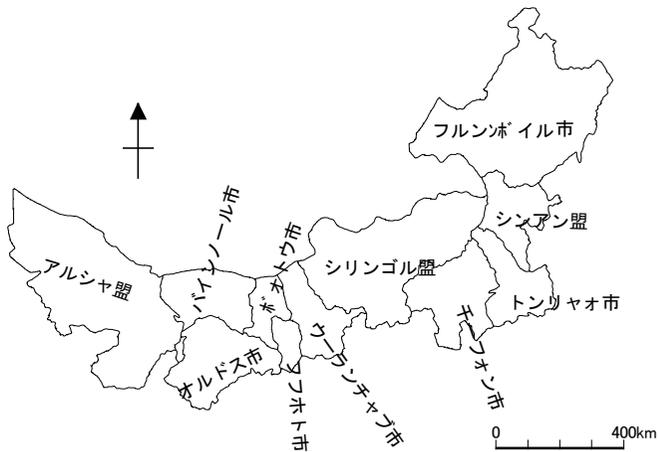


図2 内モンゴル行政区分 (9つの地級市と3つの盟)
出所) 筆者作成

内モンゴルは、多民族の地域であり、49の少数民族が集まっている。少数民族の中ではモンゴル族を主体として、漢族が多数を占めている。2010年の統計によると、モンゴル族が422.6万人、漢族が1965.1万人、そのほかの少数民族が88.2万人である。都市人口は1023.9万人、農村人口が1362.7万人である。

内モンゴル全体の人口は年々増加している。都市人口と農村人口にわけてみていくと図3が示すように、都市人口の方は近年々増加してきている。一方、農村人口も1980年までは増えているが1990年以降は少しずつ減少してきている。都市人口と農村人口を比較してみると1949年の時点の都市人口は農村人口より少なかったが、2008年になると都市人口は農村人口とほぼ同じぐらいになっている。今後も、都市人口が増える傾向にある。

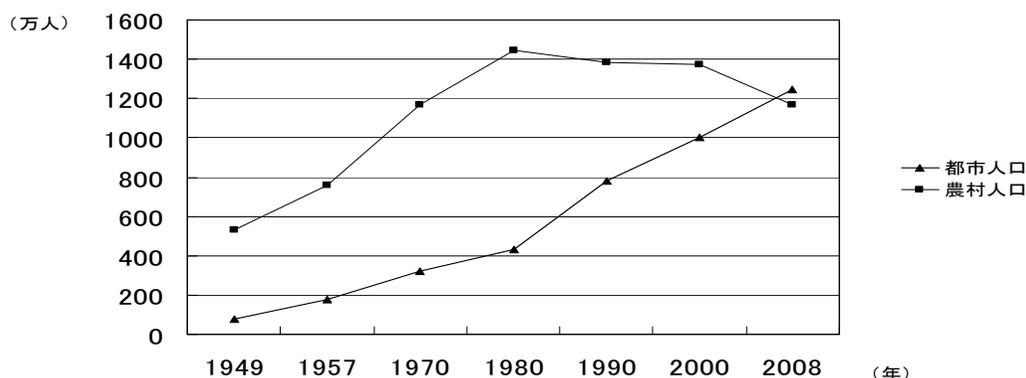


図3 内モンゴル自治区の都市人口と農村人口の推移
出所) 内モンゴル自治区統計局ウェブサイトより筆者作成

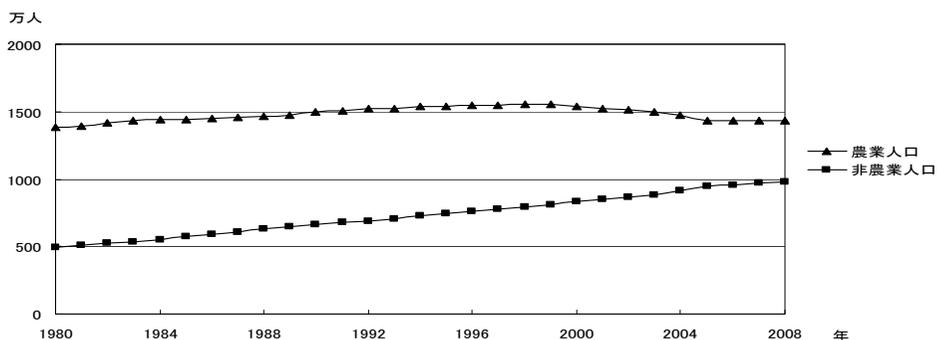


図4 内モンゴル自治区の農村における農業人口と非農業人口の推移
出所) 内モンゴル自治区統計局ウェブサイトより筆者作成

また、農業人口と非農業人口を分けてみて行くと、農業人口は、1978年から1998年まで増加しているが、2003年から少しずつ減少してきている。非農業人口は、全体的にみると、年々増加傾向にある。1978年から1980年までは、あまり変化がない。しかし、1983年から次第に増加傾向にある。これによると、近い将来、農村地域においても非農業人口が農業人口より多くなると予想される(図4)。

3. 内モンゴルの砂漠

内モンゴルの砂漠は中国国内の砂漠総面積の約 60% を占め、土地の砂漠化は毎年平均約 66 万ヘクタールのスピードで拡大している。内モンゴル自治区の 3 分の 2 の農地と 60% の牧草地が風砂による被害を被っており、中国では砂漠化が最も深刻化した省（自治区）のひとつとなっている（徳岡，1998）。また、中国にある 12 の砂漠の中で 8 か所が内モンゴルにあり、砂漠面積は 42 万 k m² で、内モンゴルの総面積の 35.6% を占める（図 5）。

内モンゴルでは、1960 年頃から砂漠化が急速に進行している。内モンゴル自治区の使用可能な草原の面積は、1960 年の 82 万 k m² から、1999 年には 38 万 k m² に減少している（徳岡，1999）。

中国の砂漠や砂地は¹⁾、おもに第四紀に形成されたものであり、その後 300 万年の時を経て、現在の砂漠や砂地となった。特に更新世中・晩期から、完新世前・晩期に砂漠の拡大が起こった。様々な資料によって、更新世の前期から中期にはタリム（塔里木）盆地のかなりの範囲がすでに砂丘で覆われていたことが明らかになっている。モーウス砂漠においても、更新世中期の風砂の堆積が見つかっている。更新世晩期から完新世前期は地球規模で乾燥・寒冷化し、海洋の面積も大幅に減少したため、中国の北部の地域は益々内陸的な乾燥気候となり、多くの湖や川は干上がってしまった。砂質で乾燥しているタリム盆地やジュンガル（準葛爾）盆地（現在のタクラマカン（塔克拉瑪干）砂漠、グルバントングータ（古爾班通古特）砂漠、連山の北（現在のブダンジラン（巴丹吉林）砂漠、テンギリ（騰格里）砂漠、賀蘭山の周辺（現在のクブ干（庫布齊）砂漠地域）オールドス（鄂爾多斯）高原（現在のモーウス砂漠）、内蒙古高原の南東部（現在のフンシャンダク（渾善達克砂漠）、西遼河流域（現在のホルチン砂漠）、およびフルンボイル（呼倫貝爾）高原（現在のフルンボイル砂漠）等の地域は、この時期に砂漠化した。

内モンゴル草原の表土の性質は薄く、軟らかく、砂漠化しやすい。黄河以南の地方と比べると、一年中風が多い乾燥地帯に属する。そのうえ、漢族農民の開墾はすべて焼き畑であり、たとえば、3~4 年たつて土地の力がなくなると、その耕地を廃棄し、別の場所に移動して、新たな焼き畑を造る。放棄されたかつての耕地は、雨や雪が少ない年であると、風に吹かれてすぐに砂漠化が進む。

オールドス地区に注目して、その開墾の経緯を歴史的に述べてみると、清代の開墾と中華民国時代の開墾という 2 つの時期がある。清代の開墾は、1697 年に、清王朝はオールドス地区の陝西省と接する地域で貧民たちの開墾を許し、陝西、山西と甘肅 3 省の漢族農民たちが次々とオールドス地区に入ってきた。そして、1730 年に、清政府は漢族農民たちのオールドス高原における農業活動を制約するため、長城線より北 50 キロ以内のところでの開墾を認めた。しかし、これが 1743 年になるとすでに北 50 キロ以内の限界を超えて漢族農民たちがケート地区にも姿を現してきた。一方、中華民国時代においては、アヘン戦争の前は長城、黄河の周辺地区とケート地区にとどまっていたが、戦争後は「全開放」政策によって、開墾は急激に進められ、その開墾は、周辺地域から奥地まで進んだ。1904 年にオールドスの東西 215 キロ、南北 225 キロの草原が開墾されて耕地となった。こうした大規模の開墾の結果、オールドス草原中部、東部とケート地区の広い豊かな草原がわずかな年月のあいだに農地となり、オールドス草原は牧畜業地区から半牧畜業半農業地区へ転換した（ウーシン旗地方誌編集委員会，2001）。

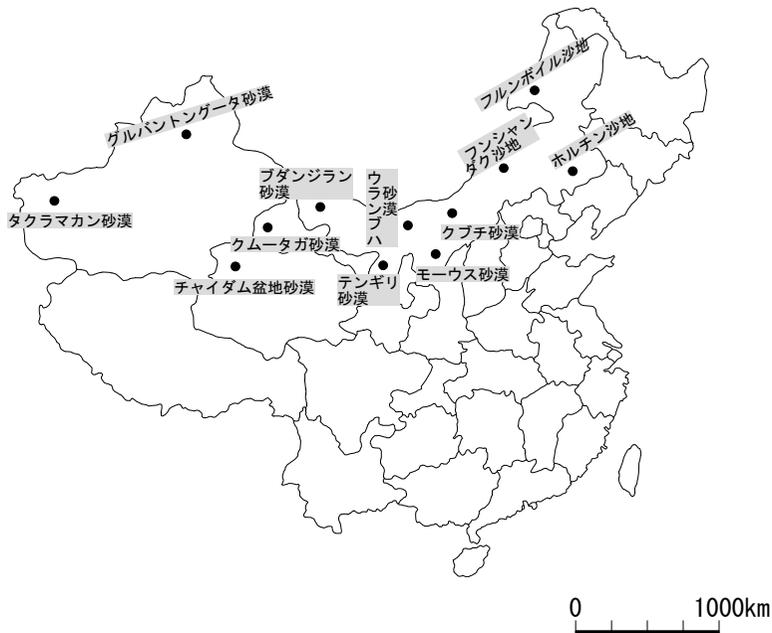


図 5 中国の砂漠の分布
出所)『中国地図』より筆者作成

4. ウーシン旗の人口変化

ここでは、民族に注目して人口変化を検討する。

内モンゴルの漢族は、19世紀の末、清朝政府がおこなった「開放蒙地」、「借地養民」政策による移民や内地の戦乱による難民であった。さらに、漢族商人に莫大な借金を作ったモンゴルの王公たちが、漢族に牧地を売ったり、牧地を耕作させて租税をとったりしたため、よりいっそうの漢族流入を招いていた。ウーシン旗では大面積の草原が陝西省に割譲され、当時万里の長城に沿っていったウーシン旗とウーシン旗の草原が山西省に割譲され、当時万里の長城に沿っていたウーシン旗と陝西省との境界線は、約 60 km も北上した。その地域における大量の漢族の入植に反対して、19世紀末から「ドゥグイラン」とよばれる大衆運動がおこっている。モンゴル族の貴族も庶民も階級をこえて、この大衆運動に参加している。

1949年におけるイケ・ジョー盟のモンゴル族の割合はわずか 13.1%に過ぎなかった。旗別でみると、ウーシン旗で 43.2%、オトク旗 31.6%、ハンギン旗 23.8%、ジュンガル旗 7.0%、エジンホロー旗 9.2%、ダラト旗 3.8%である。1949年当時において、すでにジュンガル旗やエジンホロー旗、ダラト旗では総人口の 9 割以上が漢族となっていた。総人口における、モンゴル族の割合が一番多いウーシン旗でも総人口の半数以上を漢族が占めていた。

ウーシン旗地方誌編集委員会 (2001) によると、1952年においてウーシン旗における

牧畜を中心とした人民公社（現ソム）のであるサリ（沙利）の総人口は 2,464 人、そのうちモンゴル族は、2,094 人（85%）、漢族 370 人（15%）であった。30 年の間にこの人民公社の人口は、5,969 人と約 3 倍に増加したが、人口増加を民族別にみると、モンゴル族の増加率が約 3 倍、漢族の増加率は約 4.6 倍と、漢族の人口の増加率が著しい。現在、ウーシン旗では漢族のほとんどは郷と呼ばれる行政区分に分布しているが、このようにモンゴルを主体とする村の行政区分であるソムにおいても、漢族の割合は決して少なくない。

漢族流入による人口増加と牧地の減少にともなって、これまで遊牧をおこなっていたモンゴル族は、次第に移動が困難となり、遊牧経済の破綻が引き起こされ、定住の道を歩まざるを得なくなっている。

5. ウーシン旗における農業の影響

ウーシン旗は、牧畜業を主産業とする地域である。しかし、牧畜業だけではなく、農業も広く行われている。さらに、ウーシン旗では地区区分には、「農区」、「半農半牧区」と「牧区」の区別が用いられている。ウーシン旗における経済発展の状況から、1980 年に実施された家畜分配後の人びとの暮らしを概観してみると、一人あたりの平均収入は、牧区が 608 元と一番高く、次いで農区 580 元、半農半牧区 459 元となっている。牧区は皮や牛乳などの畜産品をはじめ、食用ウシ、食用ヒツジ、羊毛、カシミアの産量も多く、これらの畜産品売売による利益が牧区の収入を押し上げている（ウーシン旗統計局、2003）。農区の主な生産物は、食糧作物と植物油の原料作物である。意外にもその播種面積は、牧区の面積よりも狭い。しかし、総生産量は牧区の 2 倍以上である。これは、耕地における灌漑普及率の差が影響していると思われる。また、農区のアリール・ゴル郷とウルド・ベイエ郷には「水田」があり、稲作栽培が行われている。それと同時に、果物栽培も行われている。牧区では農作物の産量は低い、トラクター、ディーゼルエンジン、農業用など農作業用機械、オールドス・ウーシン旗の町では、スイカやリンゴを売る漢族農民機械の普及率が高い。これは、牧区の購買力を表しているといえよう。

牧区は牧畜業を主として、牧民一人あたりの収入が高く、畜産品の価値の高さがうかがえる。牧畜業を補完するものとして農業をおこなっている。しかし、その生産量は決して高くなく、また灌漑もあまり普及していない。一方、農区では家畜を所有し、畜産品による収入もあるが、やはり主な産業は農業である。電動式ポンプを利用した灌漑農法も広く普及し、生産量を安定かつ増加させている。

砂漠化は深刻な地球の環境問題として様々なところで論じられているが、議論の中心は飢餓難民の数や、被害地の面積などである。その原因に関しても、干ばつや人口問題といったとおり一辺の解説が加えられるだけで、環境面での解析、評価はごくわずかしが行われていない。同時に、場所についても、雨季に見るものと乾季に見るものとは、環境劣化の評価は全く異なったものになってしまうため、砂漠化の進展を把握するには、もとの自然景観を正確に把握したうえで、さらに変化の過程を見つけたさなければならぬ。地球環境の危機という言い方は優しいが、それが映画を見るように具体的な形で捉えることは難しい。

6. おわりに

中華人民共和国にある 12 の砂漠の中で 8 つが内モンゴルにあり、その概況を通して、砂漠になった原因とオールドス地域の開墾について、地理的ならびに、歴史的な視点で分析した。清代と中華民国時代の開墾により、とくに、オールドス草原は牧畜業地区から半牧畜

業半農業地区へ転換したことを明らかにした。一方、内モンゴル自治区ウーシン旗における人口の分析により漢族流入と移住地域の拡大農業の影響を通じて、農耕によって漢族の移住地域が拡大し、モンゴル族の割合が一番多いウーシン旗でも総人口の半数以上を漢族人口増加したため、自然環境に大きな問題をもたらした。その一方でモンゴル族の定住化と離農を指摘した。農村人や農業人口の減少は、モンゴル族の牧畜業が定住化したため、農業と、牧畜業から離れて、非農業人口が増えている状況は一因である。そして、砂漠化をもたらしたのは牧畜業より、農業の影響の方が大きいことを指摘した。

注

- 1) 砂漠と砂地の違いは、以前は「沙漠」という表記が使用されていたが、「沙」が当用漢字から外れたために「砂」を用いた「砂漠」という表記が使用されるようになった。なお、「沙」も「砂」も「すな」という意味を持つ漢字であり、「水が少ないから『沙漠』と書くのが正しい」というのは俗説（但し「沙」の字には、草木が生えない、水が乏しいという意味はある）。むしろ、「漠」という字が、水がないという意味である。学術用語としては、“desert”に対して「砂漠」という訳語が当てられる。このため、学術用語の「砂漠」はすなじ（砂地/沙地）だけを指すものではないことは既述のとおりである。中国語では、沙漠（砂漠）・砾漠（礫漠）・岩漠・泥漠・盐漠（塩漠）等の総称として「荒漠」を用いることがある。

参考文献

- 徳岡正三（1998）：『砂漠化と戦う植物たち』，研成社。
巴図（2007）：内モンゴル牧畜経営の実態と環境問題。横浜国際社会科学研究所。12-2，pp.1-2。
ウーシン旗地方誌編集委員会（2001）：『烏審旗誌』，モンゴル族民出版社。
ウーシン旗統計局。（2003）：『烏審旗誌』，モンゴル族民出版社。
内モンゴル自治区統計局ウェブページ <http://www.stats.gov.cn/tjgb/ndtjgb/index.htm>

The Geographical Research on Natural Environment and Social Environment in Wushen Qi, Ordos, Inner Mongolia

JiMiSi

Key Words: Natural Environment, Social Environment, Wushen Qi, Inner Mongolia, China